

映画を仕事にするくらいだから、有坂壘という人は相当な映画好きだったに違いない。今そう思っていませんでしたか？
実は有坂さん、双子の兄と共にプロサッカー選手を目指し、2人で入団契約を果たすほどのサッカー少年でした。
19歳になるまで、映画はたった2本しか観たことがなかったのです。

有坂——小学生の時に『グーニーズ』を観たんです。4家族で遠足みたいに、銀座の映画館まで行った景色をよく覚えています。それも含めて楽しかったけど、映画の中に自分もいるような感じがして。観た後は近所の空き家に財宝があるんじゃないかって友達と忍び込んだりして。兄も僕も本当にはまって、自発的にもう一度『グーニーズ』を観たいと母にお願いしたんです。

でも母が良かれと思って次に映画館で観せたのは『E.T.』。当時の僕にはE.T.の姿が怖くて、その世界に入り込めなかった。兄もそうで、スポーツ畑のじっと出来ない僕たちは映画館を走り回った記憶でよく覚えています。だから、僕はスピルバーグのせいで映画嫌いになったんです(笑)。

この『E.T.』体験が引き金となり映画嫌いはその後19歳まで続きました。
そんな有坂さんが再び映画と向き合うきっかけとなったのは？

有坂——19歳で見た『クール・ランニング』が転機でした。当時付き合っていた彼女がいて。すごく控えめな性格だったんだけど、その彼女が観たいと強く言う映画で。どうしてもということで、嫌々観に行きました。でもそれが映画を観た時、雷に打たれたようだった。ラストは号泣ですよ。その翌日から映画館に通うようになりました。あの時に、ここが「自分の居場所だ」と思ったんです。

『クール・ランニング』は冬季オリンピック初出場を目指したジャマイカのボブスレー

チームの実話がベースになっています。チームの挑戦と仲間との絆が描かれ、所謂笑って泣ける1本。映画経験が少なくても、サッカー中心の青春を過ごした有坂さんには大ヒットしたのでしょうか。
でもこの時、雷に打たれたように「自分の居場所」を発見したことには別の理由もありました。
あるコンプレックスを抱えていたのです。

有坂——小さい頃から双子の弟として同級生から見られていて、常に人から比べられる視線が嫌でした。だからいつも自分は1歩引いていたと思うし、どこか自分を出し切れなかった。電車の車両もわざと違う車両にしたり。兄は生徒会長でキャプテンもしていて、あるときマラソン大会でそんな兄と首位争いになってしまっただけ。周りとしては面白い展開に視線が集まるじゃないですか。でも自分としては勝っても負けても嫌だった。相手(兄)の気持ちが分かるから。兄もそうで。辛い首位争いだった。

そんな兄とはじめて離れたのが金沢のサッカーの専門学校の時でした。兄がいない生活は海外留学のようだった。そんな中、彼女と観に行った映画が『クール・ランニング』で。

映画館の照明が徐々に消えていく、その中で“はじめて”1人になれた気がした。映画と自分だけ、誰も周りにいない映画と僕、1対1の空間だった。

その時初めて、「自分の居場所はここだ」と感じたんです。

過去3回、ここ東山旧岸邸でもキノ・イグルー野外上映会を開催してきました。その際、有坂さんの指示で上映前にランタンの明かりを順々に消す演出をしました。ランタンのゆらめく灯りが徐々に消え、最後は暗闇と自分の呼吸が聞こえるまでの僅かな時間は、本来の自分に帰っていく儀式だったのかもしれない。

有坂さんと違い、小学生の頃から映画好きだった渡辺さんに当時の事を振り返ってもらいました。

渡辺——僕はもともと映画が好きだったんです。昔は“何とか洋画劇場”っていうのを月曜から木曜までやっていて。淀川長治さんが日曜に、土曜に高島忠夫さんのゴールデン洋画劇場とかも。『ゴーストバスターズ』とか、『ポリスアカデミー』とか何回も何回も放映していたんですね。『エディ・マーフィーの星の王子 ニューヨークへ行く』とかも見てました。そして、もうジャッキー・チェンですね。ジャッキーは小学生の時にはまって、それで僕、空手習ってましたからね。

渡辺——中1の時、ジャッキー好きの友達と一緒に新作『クーロンズ・アイ』があるから観に行こうって。僕が足立区北千住出身で、友達が荒川区出身で。探せば本当は近くにあったと思うけど、当時僕らが知っている映画館がそこにしかないから、3時間くらいかけて自転車で行って。早朝出て、真っ暗になってから帰ってきましたから。帰りはヘトヘトで感想とか言える状況にない、しかも地図も持たず。この街道を行けば合っているはずって(笑)。だからすごい迷って、めちゃくちゃ時間がかかって。

ジャッキー・チェン への当時の熱い想いが伝わってきます。この話を横で「でもこうして覚えてるもんね」と微笑みながら聞いていた有坂さんに、当時の渡辺さんの印象を聞いてみると、

有坂——面倒くさいやつだったんですよ。前日ジャッキーの映画やってたら、翌日何人もジャッキーがいて同じ攻撃してるっていう。だから映画好きな人イヤなんだよ、みたいに思っていました(笑)。

有坂さんの中に、映画好きなクラスメイト渡辺さんの印象が残ったことが、その後のキノ・イグルー誕生につながります。

一方、渡辺さんの映画熱はそれ以降も冷めることがなく、学生になると更に映画漬けの日々を送ります。

渡辺——学生時代、バイトして、そのお金で映画を見られる環境にやっとなったので、本当観まくっていたんですね。友達の家を集まって俺がビデオを持って来て、みんなで観るみたいな。

(自分が観せたいもの？それともみんなが観たいものを見る？)

渡辺——両方でしたね。観たいやつをとりあえず観たい。観たことあるやつを誰かに観せると言うよりかは、これが観たいから今回の映画これね、みたいな。

渡辺——僕はそういう意味で、ずっとそのペースで映画が好きだったんですね。

渡辺さんは大学卒業後、10年以上エンタメ系の広告代理店で働き、その中でもキノ・イグルーの活動を続けてきました。

現在は、国内最大級の映画評価サイト「Filmmarks」のプロデューサーを務めつつ、映画協会と一緒に仕事をしながら、出来る範囲で有坂さんと活動しています。

中学生の時はただのクラスメイトだったふたり。そのふたりが再び出会い、キノ・イグルーとなるには？

キノ・イグルー誕生と命名の裏側を伺いました。